

俳句

池畔百吟

佐々木峯雪
ささき ほうせつ

池の辺を 経廻るうちに 陽の落ちぬ
曇り空 山瀬とともに 夏行きぬ
残照に 雲の山並 望む秋
小波に 灯の揺れる 水面かな
夕闇に 蝙蝠飛んで 富士の影
太陽を 映してざわめく 水面かな
水引いて 小鷺群れ来る 水辺かな
快晴の 風に薄の 花の舞う
愛らしく 脚を揃えて 飛ぶ鷗
西の空 雲影然と 夕映えて
大風の 薄野分けて 吹きにけり
台風の 過ぎて岸辺に 鴨来たり
戦場の如 幟旗めく 造成地
小糠雨 空も水面も 鉛色
逆光に 紅葉の 彩輝けり
秋開けて 雀かそけし 葦の原
刈草に 秋霜白く 寒い朝
秋深み 枝垂れ柳の 葉も傷みけり
武蔵野に 鷗来りて 冬を知る



イラスト © 草野義彦

黄昏に ちぎれ雲有りて 寒の入り
蓮の実の 水面に浮ぶ 寒の朝
雲間より 陽の射し凍てる 寒の朝
セキレイの 軽やかに飛ぶ 寒の朝
池の向うに 夕映に黒き 富士の影
再会の 青鷺家族の 鳴き交す
ビル影に 凍てつく今日の 寒さかな
あら貴と 凍てつく朝の 陽の光
裸木に 雀の成れる 寒い朝
みぞれ雪 シロップかけて 食べたいな
鉛色の街に 雪音ばかり 聞えけり
寒天に 青鷺鳴いて 雲を裂く
淡雪の 降る街の 朝静か

シヤリシヤリと 慣れぬ雪道 踏む朝
池の辺に 鳥の脚跡ばかり 雪の朝
病葉の 風吹けば 散る身かな
そよ風に 枯葉クルクル 舞落ちる
大バンの 陸に上りて 草を食む
年明けて 淡雪の町 モノトーン
関東に 傘も重たい 春の雪
浮島に 朝の鵜どもの 羽ばたけり
腹いっぱい 重そうに飛ぶ 川鵜かな
池の辺に 霧雨煙り 春来る
大バンの 何やら啄む 夕餉かな
池の辺に 千鳥鳴くなり 大相模
鳥たちが 去って静かな 水辺かな
鳥行きて 魚目覚むる 水辺かな
春来り 鮎のパーティー 水しぶき
春めきて 雉子の池畔を 歩きたり
梅咲けど 塗り重ねたる 曇り空
快晴の 空に浮ぶ 朝の月
裸木に 小鳥たわわな 岸辺かな

越谷の 池の向うに 見ゆる富士
あかあかと 武蔵野に陽の 傾けり
池の向う 山の彼方に 陽の沈む
豆柴を 抱きて池見る 夕かな
嵐近し 今宵限りの 桜かな
黒々と 水面波立ち 風の吹く
小魚の 小波立てる 池の面
雨続き 水量増して 鮒集う
雨上がり 種子舞踊る 風媒花
南風 お腹いっぱい 泳ぐ鯉
池端の 枝垂柳に 五月風吹く
池ノ辺の 葦吹き渡る 風清か
アジサシの 下ばかり見て 池を飛ぶ
パンの仔の 蓮の台に 座り居り
蓮の葉に 水玉散らし 夏の朝
蓮の葉に 水玉散らし 戻り梅雨
花も無く 実も無く 青葉輝けり
山瀬吹き 蘆も柳も 傾げたり
草刈りて 虫を取るか 燕たち
草刈って スッキリとした 道を行く
雨上り 番の鷺の 朝の舞
霧雨に 枝の滴を 散らす雀
生足の 涼しげに行く 晴間かな

池の端 柳に似合う 曇り空
夏の朝 池を飛び交う アジサシの狩
牛蛙 重低音で 鳴いている
六月は 富士も筑波も 見えずつて
関東に 台風来り 蓮終る
梅雨空に 雲垂れ込めて 君去りぬ
赤々と 池の面に 陽の映える
入道雲 ソフトクリーンだったら いいのにな
鷗と燕 共に飛び交う 水辺かな
青鷺の オブジェの如く ブイに立つ
お散歩の コーギーのお尻 可愛いな
葦渡る 風も優しい 卯月かな
雲消えて 冬には変わる 夏の富士
潜つてばかりいても 川鵜と言えど 鳥は鳥
水辺にて 空の彼方に 君想う
四阿に 烏も休む 暑さかな



イラスト © 草野義彦

池ノ辺の 葦を傾げて 南風吹く
台風近し 濃淡のある 曇り空
嵐来て 小波立ちて 草躍る
台風を 受けてざわめく 柳かな
大風の 中に白鷺 池に舞う
池ノ辺に 柳傾げて 嵐吹く
雲黒く 葉月の空を 覆いたり
池ノ辺に 蓮の咲かない 夏行きぬ
青鷺の ブイに留まりて 夏に行く
風涼し 慣れにし里を 去る夕べ